

あやのちゃん徹底勉強二天祭 体験版 PDF

莫問

「通い妻」あやのちゃん

梅兄は一人、人通りの多い駅前広場で待ち合わせをしていた。

ついこの間まで、プライベートのほとんどを松兄や竹兄とあやのと一緒に過ごしていたから、こうやってぼつねんと独りであるのは久しぶりのことであつた。

あのレイプ三昧だった共同生活の日々を振り返つては、パンツの中に潜む肉根の頭をむっくりと膨らませたりしていた。彼にとって、最初にして最高の女性であるあやのちゃん。最初に松兄たちに教えてもらつて初めて目にしたときから今まで、ますますおんなの色を濃くしていく彼女を毎日のように見てきたのだから、愛着もひとしおだ。

そういえば、あやのの両胸は、本当にピュアな光を放つていたように思う。淡いピンク色を帯びた乳首なんか、まばゆいばかりに白い乳肌からぷっくり数ミリ盛り上がっているような感じで、ぱっと見陥

没しているのか、そもそもないのかともささ思えた。それが最近では、綺麗な紅色を帯びて小指ほどの大きさにまで育ち、しかもちよつとした身体の刺激にさえ敏感に反応して、きゅんつと固くしこるようになっていている。しかし、最初のときより乳房が心持ち柔らかくなつた小ぶりの乳房の頂上で、乳房の形をきゅつときれいに束ねて健気に屹立しているその姿に下品さはなく、むしろ最初見たときにあった気品を一層引き澄ましたかのようにも見えた。

あやのもまたそんな乳首同様、最初のころの可愛らしさをそのままに、従順に、そして妖艶に成長していった。身体のラインはそれほど変わっていないのに、抱き心地が日ごとに柔らかくなつた。そればかりでない、二人の肉根の味を覚えこまされた彼女の腰の動きも、セックス以外の普段時でさえどこか挑発的な動きをみせるようになったし、恥じらいを見せながら兄たちに身を委ねるように股を開いた時に顔をのぞかせる、あやのの股間の肉花もますます肉身と汗気を帯びていつそう鮮やかに色づいていたつやつやと剥身を見せるクリトリスを弾けてしまいうそうなくらい尖らせながら。

性格は、とてもいじらしくなつた。ひどく恥じらいをみせるのに、いざ本番となれば狂おしいばかりに身悶えて悦びの声をあげる。その落差にあやの自

身が戸惑いの表情を兄たちに見せるようになった。なのに、あやのもスケベ女になっていつてるんだねと言つてやると、相変わらず否定して見せるのだ。それが、一層陵辱心を掻き立てるのだ。

「……お待たせ、お兄ちゃん……」

フェイクファアのコートを着たあやのが、いつの間にかそばにやつてきて、恥ずかしそうに伏し目がちの顔を赤らめてきゅっと梅兄の袖を握っていた。

梅兄はきゅっとあやのを抱き寄せる。ほぼ一週間ぶりの再会。

めでたく膣内に百回目の射精を受けた日から、あやのは松兄、竹兄、梅兄のもとへそれぞれ二日ごと、一日の休みをはさみながら順々に通うことが決められた。それぞれの家で、家事をし、食事を作り、夜には濃密に身体を交わすのだ。その際、しっかりと身体に兄たちのザーメンを取り込むことも課せられている。

つまりあやのは、文字どおり兄たちの「通い妻」になっていた。

梅兄は、あやのの着込んだフェイクファアコートの中身がとても気になってしょうがなかった。一日休みをはさんでも、あやのが次の兄のもとへ行くときは、必ず前の兄の元を離れた時と同じ格好をしないといけない約束をしているのだ。

兄達はそれぞれおもいおもいの格好をあやのに着せて帰らせているのだが、とりわけ松兄は、自身の変態嗜好から「茶目っ気」を捻り出して、あやのに思い思いのコスチュームをさせているようだ。

前に梅兄が竹兄と電話したときに聞いた話では、松兄はあやのの陰裂に何輪かの花を生け、それ以外は何も身に着けさせず、そのまま彼女のデフォルト・コスチュームであるところのフェイクファーコートを着せてそのまま帰したらしい。どうしたものか困ったあやのは、休みの一日の間、そのまま花を生けた状態で過ごしていたというのだ。その翌日、竹兄のもとを訪れたあやのはひどく内股を寄せてもじもじさせていたらしい。早速陰裂の花を全部抜いてやると、彼女は恍惚の声をあげて勢いよく放尿したそうだ。花を生けている間、トイレも我慢していたのだろう。

梅兄はその話を聞きながら、陰裂に挿した花に膣液を吸わせて潤わせつつも内股をもどかしそうにもじもじこすりあわせながら尿意を必死にこらえているあやのを妄想し、電話の後、我慢できずに怒張を扱いた。

だが竹兄の元を離れて梅兄のところに行ってくるあやのは、そこまで鮮烈な格好をしていない。ゴスロリとかいかにも安っぽい生地で出来たスクール制

服とか。電話で松兄の話を聞いてから、なんだかそれでは物足りなく思えた梅兄は、一昨日に竹兄に電話をかけ、松兄級のコスチュームを着せるように頼み込んでいた。

（竹さん、あやのちゃんにどんなの着せたんだろ？）
今日のは、いつもよりフェイクファーコートの前部分を両手できゅっと固く寄せ、小さく肩をすくませている。いつものような、コートを着てなくても外を歩けるような格好でなさそうなのは、そんな彼女の様子を見ても察せられた。

たまらずに、あやののコートの襟に手をかけて覗きこもつとする梅兄だったが、

「やっ……いやっ、だめっ。こんなの、こんなところで見せられない……！」

固く閉じたコートをさらに強く握って寄せ、あやのは梅兄の手を避ける。ならばとコートの裾を掴んでたくしあげようとすると、あやのはくるりと身体を回して数歩離れてしまった。

「お願い、ここではやめて……！ 家で……お願い」
前回まで、格好が格好だったこともあって、恥しがることもなく中身を見せてくれていたあやのが、この恥しがりようだ。ますます梅兄の期待感が高まる。

「ごめん。……じゃあ、早く家に帰ろうか」

固く縮こまったままのあやのの肩を優しくぽんぽんと叩いて腕を回す梅兄。

「……でも、帰ったら早速脱いでもらうからね」

もう今すぐにもズボンを突き破ってしまいそうなくらい、彼の肉根はもう既にはつぱつに膨れあがっていた。

外観からして年季の入った感のあるアパートの一室に、梅兄はあやのをいぎなう。最初のころはずいぶんおどおどしながら女関をくぐっていたあやのだったが、何度が回数を重ねた今では落ち着いたものだ。だが、女関に入ったあとのあやのは、それまで緩めていたコートを持つ手をまたも固くきゅっと締めつける。

本当に、コートを脱ぎたくないようであった。

しかし梅兄は、今すぐにもコートの中身を見たい一心だった。背後からほんと彼女の肩に両手を置いて、ゆっくりと襟に指をかけていく。

「約束だよあやのちゃん。見せてもらおうかな？」

「ああ、だめ……こ、心の準備が……」

弱々しげに抗いの声を上げるあやのだったが、容赦する気など梅兄には全くなかった。まるで引き剥がすかのように荒々しく、あやののフェイクファーコートを脱がす。

「お、おっ！」

最初に梅兄の目に飛び込んできたのは、何に覆われることもないあやのの見るからに華奢で白い背中だった。すべらかでつややかな背中の肌を覆うものが一切なかったので、最初に梅兄も全裸ではないのかと思つたほどだった。

前に回りこんで、ようやくあやのの今日の姿をしかと堪能することが出来た。彼女も諦めがついたのか、きゅっと目を閉じて顔を横にそらしつつも、後ろに手を組んで、うつむきがちだった顔を上げて胸を張って立つ。

淡い青みを帯びた大輪のレースの造花が、両胸にそれぞれ一輪咲き誇っていた。そして鋭く切れ込んだ股間には、胸に咲いているのと同じ形ながら小振りの花が何輪も折り重なるようにして密集していた。ほとんど紐でつながっているだけのような、際どいVカットのワンピースランジェリー。もうほとんど下着としての目的を果たしておらず、裸身に紐が絡んでいるだけといってもおかしくなくらいだった。花が咲いている部分か、かろうじて隠すべき部分を隠しているにすぎない。

それだけではなかった。股の部分、ランジェリーの下にもう一つ、あやのは何か着用しているようであった。それは、小さな花畑にピンク色の身体を透

かして、ぷっくりと盛り上げていた。

梅兄には最初それが一体なんなのか分からなかった。しかし、そのピンク色の物体を股に結びつけている二本のストラップに、ツマミのついた小さな箱が挟みこまれているを見て、その正体があらかた察せられた

早速その箱を手にとると、梅兄はツマミをひねってみせる。

「んはっん、ん、んうっ、ん……」

びく、びくんつと背筋をはね上げて、あやのは切なげなあえぎ声を上げて身体をわななかせながらくなくな悶える。

「どうしたのかな、あやのちゃん？」

あえて梅兄は彼女の口からその物体の正体を言わせることにした。

「ああ……あ、アソコがいじられてるう……」

「アソコってどこ？ 何に？ どのようにつ？」

「んううう……く、クリトリスを、ちようちよにブルブル擦られてるうう……んんっ、くう」

ツマミをいじって、バタフライのバイブに緩急を入れる。それに合わせて、あやのもきゅん、きゅんつと尻えくぼを作って前に突き出すように腰をひきつらせる。

小さな花に埋もれて、ずんぐりしたグロテスクな

蝶があやのの肉華の蜜を吸っている。快樂の風にそよいで、花畑はあやしくゆらめいて――。

本当に竹兄に感謝したい思ひだった。女関で両脚の太ももを小刻みに震わせひきつらせながら、バタフライのバインプに腰を翻弄されているあやのの半裸の姿を見ながら、梅兄はシニールなストリーをかぶせてなお肉根を奮い立たせる。

しばらく梅兄はツマミをいじり回してあやのの艶めかしい反応を見て楽しんでいたが、彼女がどこか苦しげな表情を浮かべるのが気にかかった。

「どうかした？」

バタフライの振動を止めて様子をうかがう梅兄に、あやのは切なげで弱々しいかすれ声で漏らす。

「……生まれそう……、卵が、生まれそう……」

そのまま、あやのは顔をうつむかせて玄関にしゃがみこんでしまった。梅兄はわけがわからずにただ彼女の様子を見つめるだけだ。

バタフライのストラップのホックを手で探り当てて、ぱつ、ぱつと外すと、あやのは股間の肉裂に身を埋めていたバタフライを抜き取る。ねっとりとしたあやのの愛液がちゅぷりと音を立てる。

脇にバタフライを放り出すと、あやのは股の花畑を指で足の付け根のあたりに寄せ、さらにもう一方の手指で、ぬっとりとなめった陰翳をくはあっと抓

げた。

「見てえ、梅お兄ちゃん……。私、ちようちよの卵産んじゃうよお……。っ、んううううっ！」

口端を噛んで、恥じらいを含めたような表情をかつと赤らめて、あやのは下腹部を力ませる。

すると、拡げられた陰腔の奥から、色とりどりの小粒のビー玉がたくさん、生暖かい腔液のぬめりを伴いながら勢い良く飛び出して、玄関に散らばる。

「んはあ……。出たあ……。っ」

内股をぶるぶると震わせ、時折背筋をびくんと痙攣させながら、あやのは切なげなまなざしを梅兄に向ける。たまらず、梅兄は彼女をぎゅっと抱きしめ、唇を重ねる。